

# フレンズ 第34号

特別養護老人ホーム  
短期入所生活介護事業  
通所介護事業（3カ所）  
認知症対応型通所介護事業（2カ所）

発行日 平成27年4月25日  
居宅介護支援事業（1カ所）  
地域包括支援センター（2カ所）  
（世田谷区委託/介護予防支援事業）

## 特集 平成26年度 職員研修大会

### 職員研修大会と職場の成長度

～ 私たちには仲間がいる ～

統括施設長 飯田能子

平成26年度の職員研修大会は、二つの点で従来にない成果を上げることができた。一つには年末開催を年明けに回すことにより、職員親睦会の忘年会と切り離されて、じっくり研修に時間を割くことができたこと、二つには、全事業所7ヶ所が事例発表を行なったことである。

7つの研究発表は、各15分でパワーポイントを用いながら行われた。統括施設長としての私の役割は、司会進行と質疑応答の引き回し役であるが、最後に講評をして、優秀賞と奨励賞を選び、賞状と賞金を贈呈することであった。

そもそも研修大会の始まりは、平成21年に在宅介護部職員会議の中で行われた事例発表であった。当時は、4ヶ所のデイホームがあり、共通テーマである排泄ケアについて各デイが発表した。本紙第20号に「快適な排泄ケアへの取り組み～デイサービスの現場から～」が特集されている。相互に啓発しあう研修の場として、翌年も継続したいところであったが、22年度、23年度は休止。24年度にフレンズホームが加わり、在宅介護部、施設介護部の職員研修大会として再出発し、25年度、26年度と続いてきた。職員研修大会になってから、優れた発表には優秀賞に添えて統括施設長から金一封が贈られている。

今大会の発表事例7題を聞いて感じたことは、パワーポイントの画面の処理、事例のまとめ方が数年前と比較すると格段に上手になったことである。業務の傍ら、これだけの準備をするのはさぞや、と思わせる力作ぞろいであった。内容的にも事業所ごとにサービス提供の経緯と実施の経過、目標と評価が概

ねまとめられていたから、聴衆側の理解も深まったに違いない。

本年度の特色は、7題のうち2題に「看取り」の用語が入ったことである。特養ホームの看取りは、今では決して珍しい取り組みではないが、自宅で家族が看取ることに対してケアマネジャーが支援していく事例は少ない。フレンズ介護保険サービスの「在宅での看取り～ガン末期の宣告から2年間、在宅療養した事例を通して」は、医療や介護のサービスを調整しながら、亡くなる直前までいつもと変わらぬ生活を続けた支援体制と、キーパーソンである娘の不安やストレスに向き合うケアマネジャーの役割がまとめられていた。

2025年の介護問題で提言されたように施設から在宅へサービスの力点が移っていくことになれば、看取りを視野に入れたケアマネジャーの力量が求められよう。このように意味づけを行って、私は大会の優秀賞を「在宅の看取り」に贈った。

当法人は、1施設、6事業所の小さな組織であるが、職員にとって研修大会はどのような意味があるのだろうか。介護分野で働く人たちにストレスはつきものである。『感情労働としての介護労働』の著者は、利用者やその家族との関わりにおいて「傷つき」を感じていても、職場や組織が精神的な支援をしてくれる環境にないことが、ワーカーをバーンアウトにいたらしめると指摘している。事業所を超えて、「私たちには仲間がいる」ことを実感できた、という職員の感想に、この研修大会を平成21年から見守ってきた統括責任者としての感慨も一入である。

年明けの1月23日、午後6時より、一日の業務を終えた当法人事業所(1施設6事業所)の職員50名が参加して、平成26年度職員研修大会が開催されました。

本紙では、各事業所が日頃、実践している事例の研究発表に頁を割きましたが、当日は発表に続いて質疑応答が活発に行われました。

飯田統括施設長の講評と優秀賞の発表があり、7題の中からフレンズ介護保険サービスが選ばれ、ほかの6題には奨励賞が贈られました。

## 優秀賞

### 在宅での看取り ～ がん末期の母親を在宅で看取る家族の支援 ～

発表者 フレンズ介護保険サービス 加藤 千春

＜事例概要 ～支援の開始から終結まで～＞

A様(86歳)女性 要介護3

長女様と二人暮らし。認知症はなく、自分の意思をしっかりと持った方で、読書やビデオ鑑賞が好きでした。

肺疾患で入院し、在宅酸素療法が開始となって退院した際に支援を開始。それから約半年後、酷い腹痛で入院した時、横行結腸がん末期と診断を受けました。

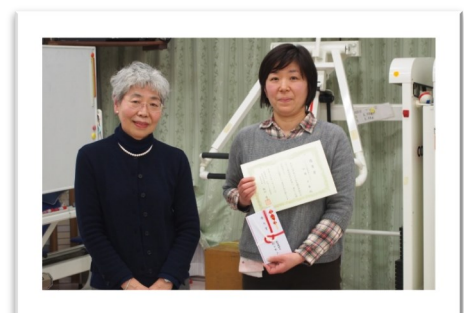
長女様は、病状進行の不安や、様々な介護が必要になった時に自分には対応できないと、「緩和ケア病棟への転院」を考えました。しかし、「告知をしない」と決めたことや、本人が「家に帰りたい」と、強く望んだことから、自宅で介護することを決断されます。それから約2年間、24時間体制の訪問診療と訪問看護、毎日の訪問介護の支援を受けながら生活をし、ご家族が見守る中、自宅で最期を迎えられました。

＜事例から学んだこと＞

A様が生活する地域は、医療・介護等のサービス事業所が豊富で、必要な支援を調整することができました。それにより、長女様や孫と食事に出かけたり、自分の部屋で読書やビデオ鑑賞を楽しむなど、それまでと変わらぬ生活を、亡くなる少し前まで続けることができました。一方で、24時間本人に寄り添う長女様へのサポートの大切さを痛感した事例でした。いつ痛みや苦しみが襲ってくるのかという不安。介護のために毎日人が出入りすることのストレス。自分の判断は正しかったのかという迷い。介護者の心身の安定なくして、本人の望む生活は実現できません。僅かでも負担が取り除けるように、関係者で情報を共有し、助言がぶれないよう努め、時には皆で話をする機会をつくりました。「本人が望んだとおり、最期まで家で介護をしてあげることができて本当に良かった。」長女様の言葉です。ご家族に悔いが残らない介護の大切さを、学ぶことができた事例です。



平成26年度職員研修大会参加者と受賞者



優秀賞を受賞して  
フレンズ介護保険サービス 加藤職員

奨励賞

自立支援を目指した選択制プログラム

発表者 デイ・ホーム上馬 澤田 朋代 鈴木 洋史



デイ・ホーム上馬は平均介護度が2.28と、お元気な方が多いことが特徴です。

利用者の自立支援につながる活動をしたと工夫したことから、

良い効果が得られた「選択制プログラム」について発表します。

「選択制プログラム」とは、複数の活動を用意し、利用者に選択していただきます。スポーツレク、手工芸、テーブルゲーム、カラオケ、散歩などが人気です。

利用者の変化

お好みの活動ができることで通所が楽しみになり、利用回数が増え、満足度が高まりました。頑張る仲間に影響され、体操や外出プログラムに参加し、意欲的になる方が増えました。自作の手工芸品をデイ・ホームで披露してくれるなど、自主性が高まりました。

職員にも変化が

職員はやりがいを感じる事ができ、離職率

の低下につながりました。利用者と接することが楽しい、笑顔が見られることが嬉しいと、自然にコミュニケーション能力が高まり、技術が向上していきました。

選択制プログラムは利用者だけでなく、職員、ボランティアさんにも元気を与えてくれました。これからもデイ・ホーム上馬の大きな活力になるよう、プログラムの充実を目指していきます。

選択制プログラムによる効果

①通所回数が増えた

家にいるより、デイホームにいる方が楽しいわ。



他のところで、入浴サービスを始めたが、デイサービスは継続したい。

②活動に意欲的になった

1人で出歩くのは、自分がないが、皆さんや職員となら外出したい。

作品を作って、デイホームで皆さんに見てもらえるのがうれしいわ。



わしより高齢の方が、体操しているので、自分もがんばらなきゃ。

奨励賞

高齢者もパソコンが好き ～アクティビティにパソコンを導入～

発表者 デイ・ホーム中丸 花枝 茂



思い込みから脱け出して

「パソコン」について利用者と話してみると、「自分で撮った写真を編集保存している」

「海外にいる孫とメールでやり取りしている」などなど、日常的にパソコンを使用している方が多いことに驚きました。

「高齢者だから、興味がないだろう」多くの職員がそう思いこんでいた事を反省し、「パソコンをアクティビティに取り入れたら、興味を持つ利用者が増えるのではないか」という意見がでました。そこで、シニア向け出張パソコン教室を開催している事業者と共同して、平成25年11月に「パソコンを使い、手工芸に用いる絵や写真などのデザインを作るアクティビティ」を開始しました。

興味の連鎖

当初は、3～4名の少人数制で実施していま

したが、参加者がパソコンを使用して作ったハンカチやエコバッグなどの作品を他の利用者に見せると、「こんな物もできるの」と興味を示す方が増え、今では7～8名が参加するアクティビティになりました。慣れないキーボードに向き合い、オリジナル作品を完成させることが、大きな達成感になっています。

また、認知症状のある方も参加していますが、特別な大きめのキーボードを使用し、ひらがなを声に出しながら文章などを作成しています。

文章を考えながらキーボードを打つ、画面を見ながらカーソルを動かすといった、2つ以上の動作を同時に行うということが、いかに大変な作業なのか、参加者を見ていると実感します。「パソコンを使う」アクティビティは、脳の活性化や認知症予防を備えた脳のトレーニングであることを期待して、今後も継続していきたいと思います。

奨励賞

認知症家族会「橙会」 ～家族ニーズに合わせ再編成～

発表者 下馬あんしんすこやかセンター 赤理 文子



橙会は、平成19年に発足しました。地域包括支援センターが制度化された翌年のことです。当初は、あんしんすこやかセンターに相談があった家族を中心に、参加者は3～10名程度でした。地域内に認知症高齢者を抱えた家族が集まって話し合える場所がなかったこと

から、随時、新しい参加者が来ていました。

しかし、最近では世田谷区主催の家族会や病状に特化した家族会などが開催され、家族会の選択肢も広がりました。このような中で、橙会の参加者は次第に固定化して行きました。そこで、家族のニーズに合った家族会にしたいとの思いから、平成26年7月にアンケート調査を実施しました。調査結果から、次のような意見が出てきました。

- ・毎月、開催してほしい
- ・お互いの顔が見える環境で話し合える機会が欲しい。
- ・専門家（医師、看護師、介護保険事業者など）の話を聞きたい。

このような声を取り入れて再編成したのが、「家族会 橙会」です。再編成した橙会は、毎月1回開催し、毎回、専門家を呼んで、前半は講義、後半は自分たちの近況報告など、話し合いの場を持っています。最近では、「看護師によるタクティールケアの紹介」「福祉用具専門員による認知症の方への福祉用具の提案」を取り上げました。

こうして、現在では新たな参加者も増え、地域の方や介護事業者の協力も得られるようになりました。今後も、新しい情報を発信し、介護者の心の拠り所となるような家族会として継続していきたいと願っています。

奨励賞

看取りってなに？ ～看取りと入院を分けたもの～

発表者 フレンズホーム 渡邊 久子

「人は自分の命を始末しながら終わっていく。これを医療も看護も介護も邪魔をしてはいけない」。これは、ある雑誌に掲載されていた平原優美さん（あすか山看護ステーション）の文章からの引用です。私は、彼女の文章を読んで、もう一度、フレンズホームの看取りについて考えてみようと思いました。

フレンズホームでは、平成26年4月から12月末まで、7名を看取り、3名は長期入院による退所でした。看取りと入院を分けたものは、一体、何であったのか。私は、水分や食事に着目して、10名について調べてみました。



体重が減る、食事量が減る、傾眠が増える、などの入所者のサインを見逃さない力が介護者には必要です。サインを見逃さないためには、「支える心」「その人を知ろうとする気持ち」を持って、日々、接し、職種を問わず食事摂取の様子を通して、その人を見ていくことが介護現場には求められます。そして、「そろそろ時期」を見極める力をつけていくのです。

人はやがて老いて死んでいきます。これを肯定する立場に立たなければ、高齢者施設のケアはうまくいきません。治る見込みがある、痛みが軽減する見込みがある場合は医療の力は発揮されます。しかし、「いつか来る命の終わり」の場合、ご家族や私たちスタッフは、何を一番に考えるべきなのでしょう。過去の事例を踏まえながら、入所者自身を中心に考えていかなければなりません。

ご家族が「看取り」を決心するときに、施設への信頼感も大きく影響すると思います。これからもご家族に信頼していただけるホームを目指して、職員1人1人が今後に生かせることを見つけてもらいたいと願って、職員研修用に私がまとめたものを、ここで発表しました。

奨励賞

法人内デイサービスの相互利用 ～フレンズの機動力を活かして～

発表者 フレンズケアセンター 岩間 順子 高山 明子

フレンズの複数の事業所がそれぞれの特色を生かして連携することで、利用者のニーズにきめ細かく対応することができた事例を取り上げました。

<事例1>

Aさん、88歳、女性。

「近所の医院に毎日のように通っている」「火の不始末が心配」などの、地域の方からの相談がデイサービス利用のきっかけでした。

1人暮らしであり、すぐにサービスの導入が必要と判断されましたが、本人の拒否もあり、利用までの過程は決してスムーズなものではありませんでした。そこで、単独での送迎や自宅訪問を行う中で、定期的な利用を当面の目標としました。

また、BPSD（認知症による行動・心理症状）の安定のため、リハビリコースとくつろぎ（認知症対応型）コースをその時の様子によって行き来して頂く等、柔軟な対応によって、現在は

週5日利用されています。

<事例2>

Bさん、85歳、女性。

入浴設備のないデイホーム上馬を利用されていましたが、自宅での入浴が困難になり、ケアセンターでの入浴について検討しました。しかし、ケアセンターからご自宅までの距離があり、送迎の件が解決できませんでした。そこで、デイホーム上馬の車両でフレンズケアセンターまで送迎することにしました。

地域に根づいたフレンズだからこそ、法人内の3つのデイサービスが知恵を出し合い協働することによって、利用者の希望にきめ細かく対応することができたと思います。



奨励賞

介護予防の取り組み

～参加者が主体的に参加し、継続できる活動にするために～

発表者 上馬あんしんすこやかセンター 塩野谷 友希

介護予防に必要な動機づけ

高齢者が自分の健康に目を向け、介護予防に取り組むには、動機付けが必要であり、取り組んだ事に対して、成果や達成感を持てることが継続につながると考えます。意欲や頑張りを評価し、維持していくためのツールとして、スタンプラリーやポイントアップカレンダーを作成しています。これは、平成18年から職員同士で話し合いや試行錯誤を重ねながら独自で作成してきたものです。

スタンプラリーの効用

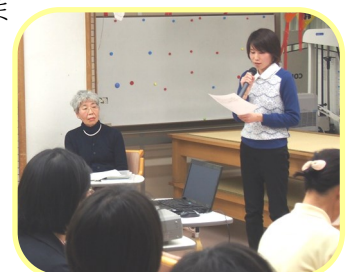
スタンプラリーは、介護予防活動への参加や、自主的に行なっている体操やウォーキングを実施したら、その都度スタンプを押すという様に使用します。スタンプを増やせるように、ポイントアップカレンダーを毎月作成、配布しています。体操を実施したことや歩数等、自由に記録でき、簡単な体操をイラストにして載せ、自主的に体操ができるようにしています。

今年度は日本百名城スタンプラリーを作成し、お城を攻略していく形式にしました。

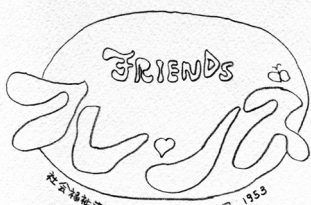
毎年スタンプ帖を楽しみにして、8年も継続して予防講座に参加されている方もいます。スタンプラリーを活用した結果、「高齢者が主体的に活動に参加し、運動を継続でき、達成感をもてるようにする」という私たちのねらいが効果として現れています。さらに、参加者同士で地域活動やイベントの情報交換をするというような成果もありました。

毎年、工夫を重ねてきたこの取り組みを、他事業所の職員にも知ってもらいたいと思い、発表することにいたしました。

地域の高齢者が自分の健康のために、介護予防が継続できるようさらに充実させていきたいと考えています。



〒154-0002  
世田区下馬2-21-11  
電話 03 (3422) 7211  
Fax 03 (3422) 7227  
Email info@n-friends.or.jp



であい・ふれあい  
地域のささえあい

ホームページもご覧下さい。  
<http://www.n-friends.or.jp/>

- 世田谷区下馬2-21-11 TEL 3422-7211(代)  
フレンズホーム  
フレンズケアセンター・認知症デイ「くつろぎ」
- 世田谷区上馬4-36-9 TEL 5430-8050  
デイ・ホーム上馬 上馬あんしんすこやかセンター
- 世田谷区野沢3-25-10 TEL 5486-7400  
デイ・ホーム中丸・認知症デイ「ひだまり」  
フレンズ介護保険サービス
- 世田谷区下馬4-13-4 TEL 3422-7218  
下馬複合施設内 下馬あんしんすこやかセンター

### 編集後記

研修大会では、発表の内容はもちろん、発表を聞いているスタッフの真剣な眼差しが印象的でした。同じ法人内の職場であっても、普段はケアマネ・ケアワーカー・生活相談員・看護師…それぞれの業務や、立場は違います。

目を輝かせ、深く頷きながら発表を聞いている職員にとって、お互いの事業所の与えられた使命がどのようなものであるか再認識できる時間になったのではと思いました。

自分自身、普段は業務に追われて目まぐるしく過ぎてゆく日々を過ごしていますが、あらためて仲間の発表を通して、この法人に所属している事を誇りに感じた時間でした。今回、広報紙を通して私たちの取り組みをお伝えできた事は大変嬉しいのですが、介護報酬改定に伴う作業と重なり、予定していた年度内の発行ができず、新年度にずれ込んでしまった不手際をお詫び致します。(S.I)

## =連載= リレーコラム 知っとく/便利帳 ⑤ 下馬あんしんすこやかセンターが引越しました。

平成27年1月19日(月曜日)、下馬4丁目到下馬まちづくりセンター、下馬あんしんすこやかセンター、下馬地区会館が入った複合施設が新たにオープン。

施設の1階には、まちづくりセンター、あんしんすこやかセンター、地区会館事務所、2階には、まちづくりセンターの活動フロアー、地区会館の大広間・和室と会議室、3階には、地区会館の3つの会議室を配置。

3つの施設が一つになったことにより、今後はさらに相談機能を充実させるとともに、地区まちづくり活動の拠点として、また、地域活動団体等の交流の場として、皆さんに親しまれる施設を目指しています。ぜひお近くにお越しの際はお立ち寄り下さい。



下馬あんすこ職員 勢ぞろいです。



平成27年1月13日 テープカットをする  
保坂区長(左)、飯田施設長(前列右)。

### 【下馬複合施設】

所在地:下馬4-13-4

交通:バス「学芸大学附属高校」、「世田谷観音」  
下車 徒歩4分

- 下馬まちづくりセンター  
身近な生活エリアでのコミュニティの活性化、より住みよいまちを目指した地区まちづくり活動の拠点となる施設です。
- 下馬あんしんすこやかセンター  
高齢の方々が住み慣れた地域でいきいきと暮らせるように様々な支援を行うための身近な相談窓口です。窓口では社会福祉士、主任ケアマネジャー、保健師等の専門職員がご相談に応じます。



あんすこ君

### ●下馬地区会館

地域の仲間やグループで俳句や手芸、ダンスや合唱等の趣味を楽しんだり、地域で集会や会議を開くときに利用でき、地域コミュニティの活動拠点となる施設です。